

そして今、変革の時

Andrew W. Barfield

外国語センター

以前、私の一般英語のライティングクラスを受講した現在2年次の学生たちを対象に、今年は専門英語を受講しているか、英語で書くこと、読むこと、聞くこと、あるいは話すことを求められているか等を調査した。インタビューに応じてくれた学生の内、全員が、自分たちの学類で英語を使って、専門英語を学ぶ必要性があると実感しており、海外の大学で英語を勉強する計画を立てている者、将来大学院進学や研究職を希望し、英語を使っていきたいと考えている者もいた。しかし、英語コースが提供されていないのか、英語にふれる授業を受講している学生はほんのわずかであった。全員が引き続き授業の一環として英語を学びたいと希望しており、そのような機会を提供してほしいという彼らの声を聞き、胸が痛む思いだった。

本稿において、今後、どのようなカリキュラムが提供可能か、全学類で共有す

ることができる一貫した英語カリキュラムの構想過程を提案したい。その前に、以下のような現状を踏まえておく必要がある。

- (1) 1年次生が受講する一般英語3コースは、それぞれ異なった教員が担当している。
- (2) 同じ学生を担当する教員間の話し合いはほとんど持たれていない。
- (3) Aレベルの学生であっても学類ごとに英語のレベルおよび関心は異なる。Bレベル、Cレベルにおいても同様のことが言える。
- (4) 1年次の終わりに実施される筑波検定では、合否のみが伝えられるだけで、それぞれの学生が英語でどこまで何ができるようになったのかという詳細は示されない。
- (5) 一般英語とその後に履修するであろう専門英語との間に一貫したつながりが見られない。

(6) 2年次以降に履修する英語を使う授業は必修として取り扱われている科目は少なく、また、選択科目として英語を使うコースを履修できる機会も限られている。

このような状況を考慮に入れると、今年6月にインタビューに応じてくれた学生たちのプラスティレーションも納得がいく。以上6点を考慮に入れながら、なおかつ各学類が共通して使用できる教養英語のためのカリキュラム開発をどう進めて行けるのだろうか。教員と学生双方がいかにその開発に関わっていけるのだろうか。

A. 話し合う機会を増やす

上記(1), (2), (5)に関して、カリキュラム開発を立ち上げるためには、少なくとも授業担当教員同士の話し合いの場を増やすことが肝要である。この場合、注意すべきことは、学類により、また教員により、問題点、利害関係、関心事が異なるため、カリキュラム開発過程も当然異なってくることをお互いが尊重する必要がある。これらの相違を考慮に入れるためには、近い学問分野ごと、例えば、自然科学、社会科学、人文の各分野内で協議を持つことが最善である。そうすることによって、共通する問題や関

心を深く掘り下げ検討することができる。

建設的な意見を出し合うのであれば、共通の立場と理解を持つために英語教員同士が次のような質問から話し合いを始めたらどうだろう。

- ・先学期の英語の授業でうまくできたことは何ですか？
- ・あなたにとって、また、学生にとって授業がうまく進んだことは何ですか？
- ・何か問題はありませんでしたか？
- ・何か困ったことはありませんでしたか？
- ・担当しているクラスのあなたと学生の授業目標は何ですか？
- ・英語の練習をする際、どの言語技能が大切だと考えていますか？
- ・このような言語技能習得は、あなたの専門分野において、必要な読む、書く、話す技能、および思考力をつけるのにどこまで通用する技能となっていますか？

このような質問から始めることによって、教員の実際の授業経験や問題点について協議を持つことができる。同時に学生の相談にのることによって、彼らのニーズを知ることができ、カリキュラム変革が大いに進展するであろう。このように、教員と学生の話し合いを持つこと

もカリキュラム開発には、必要不可欠な条件だと思われる。

B. 語彙増強のための共通尺度としてのレベルと目標の設定

上記(3), (4)で、個々の学生の語彙レベルにおいて、学生が英語で何ができる、何ができないかということを明確に把握するために、なんらかの共通尺度が必要であることがわかる。

教員同様、学生は、語彙レベルという基準で、自分たちの限界を知ることができ、どのような課題が達成可能なのかを見極めることができる。語彙レベルの違いが言語習得に及ぼす影響に関しては、応用言語学分野においてかなり研究されている。

- ・日常会話は、基本最頻出単語2,000語レベルではほとんど事足りる。
- ・基本3,000語の意味がわかっていれば、一般的テキストの約80-85%を理解して読むことができる。
- ・さらに、大学のテキストに頻出する800語を知っていると、一般教養書を自力で読み始めることができる。
- ・3,000語から5,000語レベルの語彙力と先ほどの800語を知っていれば、各自の専門分野のテキストの約95%を理解することができる。

この分析から言えることは、語彙力をつけない限り、専門分野の英語の文献は、満足できる程度には読めないということである。それ故に、この語彙分析によって、1年および2年次以降の英語コースに共通項を設定することが可能になる。事実、外国语センターの英語セクション部会では、学生をA, B, Cの3クラスに分ける代わりに以下のように6段階に分類することも検討し始めている。

- ・レベル1 0-1,000語レベル
- ・レベル2 1,000-2,000語レベル
- ・レベル3 2,000-3,000語レベル
- ・レベル4 3,000語レベルおよび一般教養語彙800語レベル
- ・レベル5 5,000語レベルおよび一般教養語彙800語レベル
- ・レベル6 教養書を十分読みこなせる英語レベル

一般英語と教養英語の境目はレベル4あたりであろう。1年次の時点では、レベル4またはそれ以上の語彙レベルを持つ学生はごくわずかで、ほとんどが1, 2, あるいは3のレベルからスタートしている。このレベル表が計画および協議上、役には立つが、これだけでは、教養英語に向けてどのようなカリキュラムを開発していくべきかという指針に

はならない。そこで、最後にこの点について述べておきたい。

C. より総合的なカリキュラムに向けて

一般英語および教養英語用タスクの整理

本学では、それぞれの学類の学生にどのような技能を身につけてもらいたいのか。例えば生物学者と歴史学者にとって、求めたい教養技能は異なるのか。心理学者が、情報関係者やあるいは医者と同じような教養能力が必要になってくるのだろうか。いったい、学問分野によってアカデミックな学習や思考とは何を意味するのか。また、どのような共通点あるいは相違点があるのだろうか。

これを説明するために、ジャンル（異なった学問分野を繋げているコミュニケーション、ライティングおよび演習の慣例化した形式）の問題にふれておこう。たぶんほとんどすべての学問分野において、ディスカッション、プレゼンテーション、およびレポートの3つの共通したジャンル形式があると思われる。それらは、教養英語のカリキュラム編成において中核をなすことができる。

もう少し詳しく1年次のライティングクラスを例にあげて説明しよう。現在、私は、地球の生態系を理解し、その環境を保護することを主眼においた学問分野

に関連のある専攻を持つ学生のライティングクラスを担当している。と言ってもクラス開校時の学生の語彙レベルは、レベル2から4まで様々であった。

一学期は、環境についての読み物を与え、ノートの取り方、要約、文献引用方法を練習させた。その読み物は、1,000から1,500の見出し語レベルの基本単語で書かれた「リサイクル」という本で各自一冊づつ外国語センター図書から借りさせた。

また、英語で根拠を付けて結論を書く練習によって議論の展開の仕方を身につけさせようと、学生が図書館やインターネットで集めた補足資料（日本語で書かれたものも多くあったが）の内から2つを選び、ノートにその練習をさせた。

一学期の最終目標は、500語のレポートにすることであった。冒頭に「リサイクル」の本の要点をまとめ、本文で、学生が日常行っているリサイクル活動を3つ上げ、結末部分では、社会的制約や環境保護に関する問題点を議論させた。この過程で、学生たちは、期末レポート作成に向けて、計画、資料のメモ取り、草稿および推敲を重ねる練習を行った。

私見によるが、この一学期の授業は学生の個々の関心を満たし、彼らの専門分野への橋渡しを開始することができたと

思っている。また、外国語で有益なアカデミックな技能を身につける一助となり、さらに、本を読むというレベルから、読んだ知識をレポートに構成を考えてまとめるという知識を身につけることができたのではないだろうか。

カリキュラム開発の観点から述べると、この事例は、異なった教養分野ではあるが、1年次から英語で練習を必要とする共通の技能があるということを示している。この例では、最終はレポートという形式でライティングに焦点を絞ったコースであったが、教養英語のリーディングクラスの場合、要点を見つけ書き出すなどの特定のスキルを磨くことも出来る。また、教養英語のコミュニケーションのクラスでは、口頭発表やディスカッションの技能をライティングのような過程で展開することも可能だ。このように、学習と練習を重ねて習得した技能は、日本語で行われる授業にも自然に生かされるだろうし、また、その逆の流れもあると考えている。

上記の例は、あくまでも提案であり、こうしなければならないというものでもない。クラスがどのようなジャンルの技能を身につけることが求められているか、異なる学類間の教員同士あるいは教員と学生間で広く話し合いの場を持

ち、協力してカリキュラム開発に望んでいかなければならない。

結論：英語のカリキュラム開発の出発点

- ・英語教員同士のコミュニケーションを増やすことによって、共通の関心や問題が見い出せる。
- ・教員と学生が到達したい英語とは何か、二者の話し合いの場を持つ必要がある。
- ・異なる授業形態と目標をレベル別するための基本的分類基準として語彙レベルを使用すること。
- ・専門分野で必要な技能は何か、そして学生に英語で学習してもらいたいジャンルは何かを確認すること。

4年間で一般英語から専門英語に移行するために掛け橋となる教養英語カリキュラムが欠けている。そして、今、変革の時が来ているのだ。

(アンドリュー ウィリアム パーフィールド
英語教育専攻)